

テーマ1 卯月氏

市長、職員の方からご紹介があったように、いま狛江市では20年後のまちをどうしようかという議論が始まっています。都市計画マスタープランというものは、国土交通省も「市民の意見を聴かなければだめだ」と言っています。言っていますが、なかなか狛江市だけではなく、市役所職員の方は必ずしも市民の意見をどうやって聞けばいいのか、それを得意としてきたとは言い難いと思います。でも、せつかくの機会ですから、市民の皆様の意見をききながら、あと1年半くらいをかけてやっていこうということで今回このようなシンポジウム・ワークショップを開催しました。

まずシンポジウムでは、都市計画マスタープラン、立地適正化計画、その他まちづくりに関わっていらっしゃる先生方に、狛江はこうあるべきじゃないかな、こういうことが重要だと思いますよという意見と、第二部のワークショップではコーディネータをしていただくので、こういうことを議論したいというこの2つをお話しいただく予定です。

お一人10分くらいとお願いしているので理解しづらい部分もあると思いますが、ワークショップの中などでご質問、ご提案いただけたらありがたいと思います。では、各ワークショップをされる先生ごとにお話しいたします。

テーマ2 加藤氏

ワークショップテーマ2「新たな日常生活の展開を見直そう」を担当します。実は、20年後の狛江の将来像ということで、先ほどありました立地適正化計画と新たな都市空間を考えていきたいと思いますということは、まさに国土交通省が出しているホームページ内にあるのです。

皆さんこのコロナ禍の中でどのように日常生活を送っていらっしゃるのでしょうか。お仕事を手でしなければならぬ、でも家は狭い。ではどこで仕事をすればよいのでしょうか、だとか、子供がいつも家にいる、3食作ってなかなか大変だ、私も仕事をしている、なんていう話が出たことと思います。

こういう世界が今後も続いていくかもしれない。むしろそれを契機に日常生活を見直してみようというのが非常に重要になると思います。先ほど市長さんがおっしゃったように、「空間」ですね。狛江市の都市空間の中でこんな場所があったらよいのに、あるいは日常生活で散歩をする空間、自転車で行く空間、新たな居場所、子供が行く場所、いろいろな場所を充実させていかないと日常生活は豊かになっていかないと思うんですね。それを、この機会にぜひみなさんに考えていただきたいというのが今回のポイントです。

特に考えていただきたいのが、よく通る散歩の道、オープンスペース。私は百合ヶ丘に住んでおり、近くに団地があり、普段は全然遊んでいなかったポケットパークに子供たちが集まっていることに非常に驚きました。それから、マンションに住んでいるんですが、皆さん夕方や朝、散歩をされている。散歩道は快適か、といったことも考えていただきたいところです。

この地図の中で小さな生活圏で成り立つ都市機能を充実させましょう、だとか身近なオープンスペースを保全していきましょうだとか、自転車ネットワーク、徒歩の散歩道を考えていきましょう、テレワーク、身近な公共施設を使った空間を作っていきましょう、道路や広場、運動場の整備といったことが書かれています。皆さんは日常生活でどうしていらっしゃるのかを皆さんから聞きたいと思っています。それを検討委員会に持って行って、計画の中で位置づけていきたいと思っています。どうぞよろしくお願いします。

テーマ3 杉浦氏

道路交通環境、三駅について問題提起していきます。

ご案内のとおり、狛江市の周辺の地図でございます。意外と狛江市は周辺に幹線道路、あるいは高速道路の利便に恵まれております。東名高速、中央高速、それから外環道、一般道では甲州街道、環八等利便性の高い道路がある割に、市内は一つもこういった幹線道路はない。着色されているのは都市計画道路で、未整備であるものはグリーン、一部黄色になっているのが概成区間といって一部はできているが完成はしていないところです。一般道路はかなり細かくあり、道路面積を市域の面積で割ると約17%になります。多摩地域の平均値が概ね10%、23区で20%くらい。道路率は高いけれど、効率的に使われるルートが少ない。ということで都市計画道路を整備していく必要がある。都市計画道路の整備率51%であり、区部の平均66%、多摩地域でも61%ということから見てもわかるように立ち遅れている。

また20年後の都市計画道路はどうかというと、一中通り、南側の水道道路のあたりが優先整備路線ですけれど、狛江通りの延伸、それから多摩川住宅から慈恵医大の方、このあたりを整備していかなければならない。

道路網の特徴として現状では北側より南側が整備が遅れている。今後20年間、南側を中心に整備を進めていく必要があると思います。

これから20年後、整備が進捗していくと、交通環境がどう変化するかということですが、20年後の社会的な変化となると、通勤・通学の義務的な交通は減少するでしょう。その割に旅行等の選択的というか、嗜好的な交通が増加すると思われます。それから、外環道ができますので、全国の高速道路網が身近になります。市内の都市交通量は道路ネットワークの効果もあり、やや減少するでしょう。たとえば世田谷通りがかつて混雑していましたが、松原通りと接続することで2割くらい交通量が減ったということがあります。

それから、これがワークショップでも触れることですが、自動運転。これがレベル3の自動運転まで進めば、交通事故が画期的に減ると思われます。自動車公害、渋滞緩和といった問題の解決とあわせて、狛江市は市域が小さいですから、市内の通行管理によって、交通効率の高い運用が可能であるという期待があります。

ネットワークの相乗効果、市内の道路は間違いなく車中心から歩行者、自転車、パーソナルモビリティ等に移り、とりわけ歩行空間、自転車利用網、歩道と車道が分離されていますが高速道路のような形態になり、交通以外の機能、2月に道路法が大改正され、きわめてド

ラスティックな改正でした。これにより道路の上にはいろいろな建物やオープンカフェ等の利用が可能となったところです。

狛江市は非常に戸建て優先に恵まれているといえますか、中央部に線路が走っていて、3駅が比較的バランスよく配置されている。市民の9割の方がアンケートによるとこの3駅を日常的に利用している。なおかつ3駅から800mの圏内に市民の半数程度の方が居住されている。徒歩で鉄道を利用できるということ。狛江駅の乗降客の伸びが9%くらい。人口の増加率に比べても極めて大きい推移をしている。

こういった駅周辺の好条件にもかかわらず、現状は満足できる状態には程遠いのではないかと。住み続け、選ばれ続けるためには3駅周辺整備によるイメージ向上が不可欠です。高架側道についても、駅前と比較的賑わいがありますが、駅から離れたところは閑散としているといったところに商店なりを配置してはどうかという思いもある。

道路の景色が変わる、と国土交通省がテーマに出したレポートにあるイラストをご紹介します。

ワークショップで議論していきたいと思いますが、狛江駅は南口の再開発、北口は出来上がっていますが交通広場、三角地があつたままではよいのか、それから弁財天池についても、観光資源としてもっと来訪者に見えるようにしたほうがよいと思う。

これが和泉多摩川駅です。多摩川へのアクセスのために手法が考えられる。テレワーク、コワーキングスペース等の需要や商店街の活性化、多摩川のサイクリングロード50kmの中間点にあたり、小田急線、千代田線、自転車の搬入が可能な鉄道でもあり、サイクリング用のスペースの余地もある。

最後に喜多見駅です。駅舎が世田谷区域にあるのですが、乗降客数や駅勢圏面積は狛江の方が多く、さらに野川があります。したがって、喜多見駅の利用者としては狛江市の方が多いという見方ができ、一体となった整備が必要であると思います。

テーマ4 入江氏

テーマは「みんなに愛される公園、みどり、農の風景づくり」です。ワークの視点はこの3つになろうと思います。公園、緑地、農地を生かした風景づくりを狛江市でどのように考えていったらよいのか、皆さんと話し合っていければと思います。

先ほど加藤先生からも、コロナの自粛中という言葉がありましたが、3、4、5月はとりわけ私の関わる公園の方々に聞いても、日中に、しかも身近な小公園で家族の利用が多いというお話を聞きます。都市部においてはとりわけ貴重なオープンスペースといえると思います。多くの市民にとってもリフレッシュするための貴重なオアシスといえます。小公園の管理不足は多くの町で課題となっていました。コロナ禍においては3密を避けて公園を分散して利用してください、混んでいるところには集まらないでください、ということが呼びかけられました。

果たして公園はそれほど近くにあるのだろうかということ、分散されるほどしっかりと

ネットワーク化されているのだろうか、といったことを今後も皆さんとのワークでも考えていきたいと思えますし、一方で、これまで皆さんが日本史で学んでこられたように、明治時代にコレラが流行したとき、何が起きたか。

1880年代には東京の人口が100万人を超えました。伝染病のもたらす「創造」の側面のおかげで、日本初の都市計画制度、東京市区改正条例が公布されます。そのときに「市民にとって新鮮な清潔なる空気を吸えるのは公園をおいてほかにない。公園は都市の肺臓である。」ということが、それより100年前、イギリスの産業革命期に公園が誕生するわけですが、それと同じことが日本でも起こった。その結果日比谷公園をはじめとする大公園11か所、小公園45か所が整備されることになりました。まさに伝染病がきっかけとなって良好な環境を創造しようと社会が動き出したのです。前向きに考えれば、災い転じて福となす、ピンチはチャンスかなと思います。コロナ前からSDGs、オーバーツーリズムや食料自給率の問題であったり、農業担い手の問題、様々な課題がありました。そういった課題に対してよりよい環境を創造しようという社会が進化する大きなチャンスだと思います。

現場で発想する地域のコミュニティデザインが大事だと思っています。そんな視点を持って、歴史が人間に学ぶということで粕江を見ていくと、粕江市の古い地図ですが昭和12年の地図です。河川がどこを流れていて水田や樹林地がどう分布しているかがよくわかる地図です。そして、白く抜けているところが畑です。武蔵野台地と呼ばれる台地上に立地して、河川に添ったところには水田がある。そこに現在の生産緑地を重ねてみますと、その台地上には農地が広がり水田地帯にも農地が広がっていることがわかります。さらにこれに公園を重ねてみます。すると北部地域の台地上のところに公園が非常に多い。そして中部地域には程よく、南部地域には少し少ないかなということが見えてきます。全域にわたっていえることは、大きな公園が少なく、小公園が非常に多いということが言えます。生産緑地地区が非常に多く、農の風景の保全、ということが期待されています。農業の特産品に枝豆があります。水田地帯が非常に多かったことがゆえんとしてあるということも農業従事者からも聞いております。マメ科は痩せ地に育つ。それと、粘土質の土壌によく生えます。田んぼがあったところは当然粘土質で、少し痩せている。あまり肥料を多く撒くと育たないということです。そんな視点を持って、農業やあるいは緑、公園といったことをワークショップで話していければと思っています。

テーマ5 河上氏

防災のまちづくりについて、国外、他地域の事例をご紹介しますことで、このあとのワークショップの参考としたいと思います。

まず、20年後の2040年にどんな社会になっているでしょう。先ほどまさに市長が話してくださいましたとおり、特にアメリカでは2025年から49%の職業はAI、ITに代替されます。そして、若い皆さんは、まだ存在しない職業につく。これが65%。これが2040年を待たずに始まるだろう、特にアメリカでは統計的にそのように言われています。2040年に向

けて世の中が大きく変わっていく。そのことを私たちはまず踏まえないといけない。

日本においても2040年にどうなるという予測は立てられています。文部科学省があらゆる分野の学者を100人くらい集めてブレインストーミングしています。その中で、50の将来社会像を描いています。大きくは4つのキーワードに集約されるといわれており、1番目「変わりゆく生き方 (Humanity)」これは多重人格社会、寿命を選択できる、超生物的、やはりここにもAIの影響があります。ネット社会とAIをどうつなぐかという影響があって、リアル社会とネット社会、そして個人の心の中のバランスをどうとっていくか、という「多重人格」や、健康寿命と物理的な寿命が同一になる、技術革新が進んで自分で寿命を選択できる「ピンピンころり」時代だとか、「超生物的」、これはバイオの技術も進むしAIも進むことで、何が生き物かということがボーダーレスになっていく。その中で人間としてどう生きるのか、人間の幸福とは何なのか、そのためにはリアルなコミュニティの価値が高まる。これがヒューマニティとしてわかっています。

2つ目「誰一人取り残さない (Inclusion)」では空間を超えた技術がさらに進みます。あらゆる分野でかなり進むと思っただきたい。

3つ目、「サステナビリティ (Sustainability)」、持続可能な社会。不確実性があって、特に防災では「想定外」という言葉が用いられますが、想定外すら吸収するシステム、生命科学も進歩していくことが考えられます。生命科学は、例えば都市のインフラなども人間が更新していくのですが、AI技術が導入されることで勝手にメンテナンスをしてくれる、そんな時代を目指していくということです。

4つ目、「不滅の好奇心 (Curiosity)」。地表を離れて宇宙、サイバー空間、そのようなところに生活の場所、生産の場所を移すであろうということです。その中で、どうしたらどう変わっていくか。インターネットを使って災害に対する備えが十分な社会ということが考えられます。重要視されるのがハザードマップ、リスクマネジメントプラン、これは個人情報との管理と相まって、自分でまたは地域でどういう風に管理していくかということが非常に重要視される時代になります。そして市民が自分たちで社会課題を解決できる社会ということでリスクガバナンスを実現する社会科学的手法。ネット、AIを含めていろいろなコミュニケーションの中でヒューマンセントラルデザイン (人間中心のデザイン) の意思決定システムが重視される時代になっています。

具体的に、気温が世界レベルで上がり、海洋表面がどんどん上がり水害が増えます。世界レベルで自然災害に強い水上都市を作ることが考えられています。これに適應できない国は生き残っていけない。

低層地は緩やかな河川だとか運河と一体になって居住エリアを作る。災害があったときには水没したり一部は浮かせることで安全性を確保する。実際にポリネシア等南の国でこの取り組みは始まっていて、2040年には技術課題がほぼ解決する、法律的問題は少し残っていて民間の人の「気持ち」の問題も少し残る。しかし技術的には解決していくし、地球の気候変動、気候危機とあわせると2040年には一般分譲開始で新しい水上都市を世界中で

作っていかないといけない。そうすることで洪水リスクを軽減し、都市部に聖域を造成して循環利用する自然共生型都市、これは50の新しい社会像の後ですが、一方でとても新しい技術を持ちながら、江戸時代の循環社会のアイデンティティも踏まえた日本の都市というのが想像されています。

災害復興にも、いまはタワマン傾向がでており、問題も出てきていますが、結局は低中層ビル・マンションくらいに落ち着いてくるだろうと考えられています。

令和時代の防災戦略。気候変動適応型ということで、価値観と方法論を大きく変えてほしい、というのが本日のメッセージです。世界の気候が危機レベルの水害です。浸水、洪水、水だけを考えてきましたが、これからは風がすごく脅威になります。それから世界中で気温が上昇しています。雨が増えて湿度が増します。コロナやインフルエンザなど乾燥により現れますが、湿度により都市の衛生が問われることになります。医療等も含めた対策が求められます。

世界中で適応策が始まっています。世界中で低層でゆたかな住宅環境への再評価が始まっています。

アメリカの水害対策の図で、結構前からやっているモデルで私も注目しているものです。ビーチサイドは商業施設なので、比較的いろいろな建物が立地します。ただ、何かがあったときにバッファゾーンまで波が来てしまうので、水没してしまうことも意識しながら日常のレジャーゾーンとして活動していく。そこに、ハードな壁を作ってその中に緩やかな良好な住空間を作っていく。

そうした取り組みを全米で行っていかうとしています。その中で、個人の取り組みに注目して政策が進んでいます。

個人の視点としては、リスクをよく知りましょう、保険に入りましょう、土地を少し高くしましょう、階段等をメンテしやすいように高くしましょうといった取り組みがあります。防護壁を作る都市構造、沿道についても2mくらいかさ上げしましょう、排水も街中でなく浸水区間で排水する。バイオのメカニズムを使って自然に波を弱める方法を考える。貯水池から地層を掘って行って深いところで水を流す。そして、適正立地ということで、一部の居住空間は移しましょうということ。

日本でももちろん始まっています。特に令和に入ってから、気候変動と防災の両方を含めた戦略で対応していかうということが言われています。

防災も変化しました。都市防災ということで行政の課題と考えることが多かったので、個人と地域がどう取り組んでいくかが命と財産に大きく影響する時代になってきます。水防法が改定され、不動産の売買にあたってハザードマップを説明することが義務化されました。そこに住んでいる人がある程度ハザードを理解した上で住む。もし被災してもそれはご自身の責任ということも重視される時代にどンドンなってきた。

東京都の推奨住宅ということで、ハード・ソフト両面で評価の高いものが東京都LCP住宅として表彰されています。まだ港区と墨田区に2件しかありません。

避難行動も変化してきました。必ずしも避難所に行くのではなく、在宅避難もしましょう、そのためには個人の事前の準備力が大事ですよ、ということが言われるようになりました。

葛飾区では「浸水対応型市街地構想」を打ち出しています。駐車場として使っているところについて、浸水してもやむを得ないところとして事前に想定して備え、使いもするし水に浸しもするという、両方の意味で水に近いまちづくりを進めています。

どんなまちなら住み続けられるか、緑、農業など、まちの良さを活かした防災を、みんなで考えたいと思っています。

テーマ6 井上氏

拠点の問題について簡単に述べたいと思います。

コロナが流行し、何が一番変わったかという、仕事、私生活が軒並み自分の家及び住んでいる地域に依存する場合、そういう時代だからこそ、身近なところをより魅力的な場所にしないといけないのではないかという問題意識で「拠点」というテーマにしました。

都市計画マスタープランは色々な分野を扱います。道路網の課題や防災の課題等といったテーマがある中で、拠点という切り口で議論したいと思います。拠点というのは、みんなの拠り所になる場所ということですが、言葉を換えますと、狛江のセールスポイントとなるような、自慢できる場所、ということでもありますし、あるいはみんなが集い、ふれあい、そこで楽しむような場所ということになります。今の狛江にもそのような場所はたくさんありますし、もう少し「こんな風にしたらよりよい拠点になるだろう」ということを話したいと思っています。

今はどんな拠点があるだろうか、こういう拠点ならよいのではないか、ということから話したいと思います。大きく3種類で考えてみました。

1つは賑わい、活気のある拠点。駅の周辺や商店街、大規模な施設、大規模な店舗等。

2つ目は癒しの拠点という表現をしました。狛江は水と緑が豊かなところですので、より魅力的な場所として癒しの場所としていく。多摩川や水路、先ほどもお話のありました農地もたくさんあります。農地は残していくべき場所ですけれども、みんなの拠点としていくためにはどうすればよいのかという議論をしたいと思っています。

3つ目はその他の観点です。狛江の文化、歴史の拠点。まだ話題になっていない穴場、パワースポット等の発掘について議論したい。

どんな場所なのか、そこをどのようにしていけばよいのか、計画的に拠点づくりを目指すのであれば、といった観点で、さらにはどんな方法で進めればよいのかといったことを話していきたいと思っています。

テーマ1 卯月氏

6つのテーマについてお話いただきました。私はテーマ1を担当します。なぜ10代、20代の人たちとお話をしたいのかを少し説明します。

20年後の狛江市の姿を考えようというとき、じゃあ私は20年後に何歳になっているだろうと考えると、高齢者の視点になることは避けられないと思う。しかし、まちは生きているわけです。20年後の現役世代と考えてみたときに、今の10代、20代、30代といった若い人たちの視点をもっと取り入れていかなければならないだろうと思います。都市計画マスタープランはかなり先のことを示しているから、なかなか思いつくものではなく、子どもに意見を聞いたところで知識も経験もないんだから、無理だろうとなりがちなのです。しかし、以前に九州で都市計画に携わったとき、高校生と一緒にまちを歩いて、どんなまちにしたいかを聞きました。聞いてみると、子供たちは確実に意見を持っています。発言する権利がある。しかしそれを表に出す機会がない。きちんと聞けば素晴らしい意見を聞かせてくれる。20年後のまちを考えるにしたって、来年どうするか、子供たちは将来どこの学校に通うのだろうか、そのころ小田急線はどうなっているのだろうか、あるいは20年後には子供がいるかもしれない。そのときに住んでもらえるかを考えなければならない。

2つ目は、子供たちにもっともっと発言、提案の機会を与えると素晴らしい発言をたくさんしてくれるという体験をたくさんしてきました。「高知子どもファンド」という仕組みがある。毎年子供たちのグループの意見に、予算をつけてお互い一緒に応援してやっという取り組みをしている。またミュンヘンではオンラインで子供たちの提案を募る試みがありました。テーマはごみ問題や公園があまりに使いにくい、といった話題が出ていました。ワールドワイドで、子どもの発信により大人が変わっていくという事例があります。

3つ目は、狛江市を持続可能なまちにしていくこと。今狛江市に住んでいる人たちが外に出ていかにするにはどうすればよいのか。今狛江に住んでいる子供たちが狛江が大好きだ、狛江市に住み続けたい、狛江市は自分が何か言ったら変わる町なんだということで、市民としての権利もあるけれど責任も果たせる立派な市民になってほしいという願いを、こうした経験から子供たちに取り組んでもらいたいという思いがあります。

一年前に行ったアンケート調査、市民1500人を対象としたアンケートで、各世帯に送ったものなのでふつうは世帯主の方がこたえられるものですが、15歳以上であればこたえてくださって結構ですと申し上げた。この手のアンケートでこのような言い方をしたのは私が知る範囲では初めてですけれど、10歳代からは21人、20歳代は41人、あわせて10%強の回答があった。アンケートの回答率35%というのも高かったのですが、15歳以上からの回答率がきわめて高いということに、策定委員会でも驚きました。狛江市民の将来のまちへの関心も強いだけでなく、子供たちにとってもそうなのだということを確認しました。内容で一番驚いたのは、緑の豊かさということに対して、10歳代の子たちが、各年代で最も高い満足度を示していた。狛江市は緑が多いんだという印象を10歳代の方々を抱いている。比較すると申し訳ないのだけれど、70歳代の方々には緑について評価していないということが読み取れる。逆に子供たちが満足していないこととしては図書館、スポーツ施設が上がっている。

20代についても緑の満足度は高いのですが、働く場所や機会の充実が不足しているとい

うことが読み取れる。生活スタイルの変化もあり、働く機会を狛江市の中に欲しいという希望が強い。さらに、まちづくりで重要だと思う項目について聞きますと、住宅地としての住みやすさ、水害に対する安全性、これは他の年代でも同様ですが、注目すべきは公園の広さ。10代の人が公園の広さが重要だと主張しており、70歳以上においては2.5%、50歳代3.3%、20歳代で4.3%、10代では23%の人が必要性を訴えている。大人も認識してはいるけれど、子供たちはもっと感じていることを大人は認識しなくてはいけません。

20代では買い物しやすさ、子育てしやすさが大事だという感覚が目立ちます。

満足度と重要度の関係でみると、一番満足度が低く重要度が高いのが水害です。水害に対する安全性。ただ、10代で重要なのが公園が2番目。同じ項目で20代はやはり水害が1番目、2番目は子育て環境の重要性。

我々がもう一つ注目したのが自由意見。自由意見は関心がなければあえて書かれはしないところなのですが、今回は10代の21人のうち12件もがいろいろな意見を書いてくれた。これが関心の高さを表していると思いますが、体育館、公園が少なすぎる、喜多見の駅前に本屋さんが欲しい、枝豆を使ったアイスが美味しいのもっと特産品を売る場所があればよい、といった声がありました。

20代についても41人の回答者のうち28件の自由意見がありました。今後子育てと仕事を両立したい。狛江市はとても住みやすいところですが、子育てには最悪の環境です、とまで書かれているものもあります。防災無線が聞き取れなくて不安です。

全体として、10代から挙がったキーワードは断トツで公園、もっと充実してほしいということでは図書館、そして安心安全。20代では子育て支援、子育ての環境、安心安全。従いまして、テーマ1のワークでは、これをさらに議論していきたいと思います。本日はご紹介には至っていませんが、全中学生を対象としたアンケートも実施しております。